
大日本帝國軍最新兵器解剖

0 0 7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本帝國軍最新兵器解剖

【NZコード】

N4198F

【作者名】

007

【あらすじ】

本編である、第七独立機動艦隊「神出鬼没」・米海軍の悲劇」に登場する兵器をこの小説では早紀様、亞由美様、喜恵様と一緒に解剖していきます。この作品は兵器解剖に重点を置いてるので物語ではありません。

20式重戦車

この小説は現在私が書いております

第七独立機動艦隊～神出鬼没！！～米海軍の悲劇～

に登場する兵器についてその兵器の完璧な説明をさせていただきます。

さて記念すべき最初の兵器は……

帝國海軍・陸軍兼用重戦車20式重戦車

記念すべき最初の兵器が主役の大和級でなくて申し訳ありません。

しかし今後の上陸作戦などで活躍するので20式重戦車をトップバッターにしました。

まず20式重戦車の概要を詳しく解説します。

全長7・80メートル

最大幅4メートル

全高3メートル

乗員4名

主砲115mm砲

機銃30mm重機銃

最大装甲厚170mm

時速55km

です。

この20式重戦車を考えるにあたって、史実のIS-4重戦車を参考にしました。

史実のように情けない戦車だけでなく立派な重戦車を開発しようと考りました。
実は大和級よりこの20式重戦車のほうが先に思いついたんですね。

さて記念すべき最初の兵器は20式重戦車でした。

次回はどの兵器なのかご期待ください。

20式重戦車（後書き）

何か質問及び疑問があれば言つてください

超弩級戦艦大和級（前書き）

本編の主役を解剖です。

超弩級戦艦大和級

早紀

「ちよつと作者。」

作者

「はい。なんでじょうか早紀様？」

早紀

「あんた。本編をほつたらかして」こんな物を書き始めたのね。」

作者

「…? いや。その……」

亞由美

「そつよ。作者君。本編を書かないで」こんな物を書き始めるなんて

……」

作者

「亞由美様まで……。落ち着いてください。」

早紀

「私達は常に冷静よ。」

作者

「早紀様。全身からダークなオーラが出てますよ……」

喜恵

「作者さん。早く説明をしないと。」

作者

「あつ。そうでした。それでは。」

帝國海軍超弩級戰艦大和級

作者

「今回こそ大和級の説明です。」

早紀

「あら。今日は私達の説明なのね。」

作者

「はい。そうでござります。早紀様」

早紀

作者

「はいっ！――！」

超弩級戦艦大和級の概要は以下の通り。

全長370メートル

最大幅50メートル

満載排水量1350000トン

速力35ノット

主砲51センチ3連装3基9門

副砲25センチ3連装3基9門

高角砲127ミリ速射砲単装12基12門

80ミリ速射砲連装16基32門

噴進砲18センチ40連装6基

対空機銃40ミリ4連装50基200門

4連装対潜魚雷発射機2基対潜哨戒ヘリコプター3機搭載

主砲に『サーマルジャケット』及び『冷水放射基』を装備。

発電機を『ターボ発電機』及び『ディーゼル発電機』に変更した為、砲塔駆動を水圧方式から電圧方式に変更した。

『三式射撃レーダー』及び『二二式水上レーダー』及び『一五式対空レーダー』及び『三三式ソナー』を装備。

『三式射撃レーダー』は対水上、対空問わずに一五の目標に対するリアルタイム照準と追尾が可能となつた。

バルバス・バウからシリンドリカル・バウに変更した為に全長が40メートル延び370メートルになつた為、旋回性能のは正の為に、

艦首下艦底中央部に引き込み式副舵（並列一枚配置）を追加装備。

生物、化学、放射性、核兵器（CBRN）対策の全面的導入。

主に対放射性塵、汚染物質対策の為、木甲板を廃止し鉄、鉛粉末混合コンクリート層による耐熱表面被覆に更新。

また放射能塵除洗用散水装置を設置して区画の一部に含水層を追加し、火災、弾片防御、対核防御の向上を達成。

その他、主計科倉庫、被服庫、糧食庫、給水所を各所に分散配置。

全配置で戦闘配食と負傷者の応急措置が可能な『戦う大和ホテル』になった。

大和級は防水区画を四百トンにまで細分化。

外部装甲のすぐ内側にゴムを注入した層を設け爆発時の衝撃を吸収する。

そのまた内側にはスポンジの層を造り、浸水を吸収して水圧から隔壁を防御し浮力を増大させる。

水中弾の対策には喫水線下の装甲の傾斜角を工夫して爆圧を減殺する。

重装甲に対する浮力の問題だが、史実の大和級の煙突上部や甲板面に使った『蜂の巣鋼板』を応用して何層にも平板鋼にサンドイッチすれば半分程度の重量で同じ強度が得られた。

穴の直径を一五ミリにすれば前後を挟む鋼板は一ミリで十分だという実験結果を得ていた。

そして十分な浮力を得るため『大和』を拡大、発展させて艦幅を十分に取りバルジを設けて速力が落ちるぶんタービンを増やした結果三三ノット（後にバルバス・ハウからシリンドリカル・ハウに変更したため三五ノットになった）の速力を得られた。

砲弾の種類は以下の通り。超々重量徹甲弾

対空用三式弾

対潜用四式弾

対地用五式弾（今でいうクラスター弾）
を搭載している。

作者

「これが超弩級戦艦大和級の概要です。」

早紀

「作者。あんたよく考えついたわね。」

作者

「実は……」

早紀

「どうしたのかな？」

亜由美

「作者君どうしたの？」

喜恵

「どうされましたか？作者様」

作者

「実は、大和級は自分で考えたのではなく小説からアイデアをいただきました。」

早紀

「やつぱりね。あんたが考えつくわけないじゃない。」

亜由美

「参考にした小説の名前を言いなさい。」

作者

「『戦艦大和地中海決戦録』、『戦艦大和歐州激闘録』、及び『不沈戦艦紀伊』ねー作を参考にいたしました。」

早紀

「覚悟しない。」

作者

「いやつ……やめてくれださこ……!! 対一は卑怯です。」

亜由美

「問答無用。」

嘉恵

「もう手遅れです。」

作者
「助けてえ～～～～」

超弩級戦艦大和級（後書き）

「」意見、「」感想、「」質問、疑問点等々ありましたらお書きください。

超弩級航空母艦大和改級（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

超弩級航空母艦大和改級

作者

「今日は準主役級の帝國海軍超弩級航空母艦大和改級を説明させていただきます。」

早紀

「奴隸。今日は由香達を紹介するの?」

作者

「はいわづです。早紀女王陛下様。」

(作者が奴隸になつた経緯は本編を参照)

作者

「それでは、由香女王陛下様、綾夏女王陛下様、理華女王陛下様の登場で～す。」

由香

「はじめまして～。由香～です」

綾夏

「綾夏です。よろしくね。」

理華

「理華と申します。よろしくお願ひします。」

作者

「さて皆様登場したところで超弩級航空母艦大和改の概要を説明し

ます。」

全長330メートル

最大幅75メートル

満載排水量1250000トン

速力35ノット

高角砲130ミリ速射砲単装20基20門

噴進砲15センチ30連装8基

対空機銃40ミリ4連装60基240門

搭載機150機

艦上戦闘機40機

艦上攻撃機40機

艦上偵察機25機

早期警戒機25機

攻撃ヘリ10機

対潜ヘリ10機

『アングルドッキ』及び『蒸気カタパルト』を世界に先駆けて装備した。

大和級と同じくシリンドリカル・バウに更新し、その中にソナーを装備している。

レーダー等は大和級と同じ装備である。

甲板には11000のCNC甲板を敷き詰めている。

作者 「これが超弩級航空母艦大和改級です。」

由香 「ねえ。奴隸くん。」

作者 「はい。なんで『ゼ』いましょうか？由香女王陛下様。」

由香

「私達は最初は超弩級航空母艦信濃級だったのにいつの間にか超弩級航空母艦大和改級になつてるのはどうしてかな？」

作者 「！？」

綾夏

「どうしたのかな～奴隸くん！～！」

理華

「教えてください。」

作者

「すいませんでした。私のミスです。」

早紀

「奴隸のくせに間違えるとは言語道断。成敗つ～～～～！」

作者

「お許しあ〜〜

次回はいつの更新になるか?..

超弩級航空母艦大和改級（後書き）

超弩級航空母艦大和改級は『勇戦！！第八航空艦隊』に登場する、『三笠』を参考にしました。

防空重巡洋艦最上級

「さてさて。今回は防空重巡洋艦最上級について説明します。」

望

「奴隸～。遅いよ～。」

作者

「望女王陛下様。気が早いですよ。」

望

「だつてえ～。紹介が遅いんだもん。」

作者

「すいません。それでは紹介します。」

作者

「望女王陛下様、愛美女王陛下様、祐花女王陛下様、志乃女王陛下様、千穂女王陛下様です。」

望

「よろしくね～」

愛美

「よろしく～。」

祐花

「よろしくお願ひします。」

志乃

「以後お見知り置きを。」

千穂

「よつろつしくね。」

作者

「それでは防空重巡洋艦最上級の概要を説明します。」

防空重巡洋艦最上級

全長190メートル

最大幅25メートル

満載排水量9800トン

速力35ノット

主砲25センチ連装4基8門

高角砲130ミリ速射砲単装20基20門

噴進砲15センチ30連装8基

対空機銃40ミリ4連装60基240門

対潜ヘリ2機搭載

対空戦闘を主眼にした防空艦である。

防空艦の為、セイロン島沖海戦までは主砲を装備していなかつたがセイロン島沖海戦後に砲撃数が多いほうがいいと言う事で最上級にも主砲が取り付けられた。

バルバス・バウを装備。

電装関係は大和級と同じである。

弾頭に

対空用三式弾（V-T信管）

対潜用四式弾

対地用五式弾（クラスター弾）

超重量徹甲弾

を搭載している。

作者

「これが、防空重巡洋艦最上級の概要です。」

望

「ねえ。奴隸さん。」

作者

「何で、ござこまじょうか？ 望女王陛下様。」

望

「わたしだけでなく、妹達も思つてゐる事よ。」

作者

「…………。まさか…………。」

一同

「本編でも出演させりや〜〜。」

ドグワアアアアアン！……！

「作者 もやあ～～～。」

防空重巡洋艦最上級（後書き）

次回は駆逐艦雪風級です。

駆逐艦雪風級

作者
「さて。今回は駆逐艦雪風級について、説明したいと思います。」

早紀

「由美～」

由美

「早紀司令。」

早紀

「由美。捕獲。」

由美

「助けて～」

亞紀

「由美姉さん奪還作戦を始動する。」

美紀、渚、美香

「了解！！！！！」

亞紀

「かかれつ！！！！！」

作者

「.....」

作者

「あつ。皆様すいませんでした。あまりにも騒々しかつたもので油断していました。」

作者

「それでは駆逐艦雪風級の概要を説明します。」

全長150メートル

最大幅15メートル

満載排水量7500トン

速力35ノット

主砲15センチ連装4基8門

高角砲127ミリ速射砲単装10基10門

対空機銃40ミリ連装40基80門

噴進砲15センチ30連装4基

魚雷発射管4連装4基16門

対潜ヘリ1機搭載

駆逐艦であるが軽巡洋艦並の武装を持っている。

バルバス・バウを装備

電装関係は大和級などと同じである。

以上が駆逐艦雪風級の概要である。

作者

「さて。概要の説明は終わりましたが、早紀女王陛下様はどうかされたのでしょうか。」

亜由美

「あの姉に捕まつたのだ。とにかく由美は捕食をやめただろう。」

作者

「やつぱりやつですかね。」

喜恵

「やつですよ。」

作者

「しようがないですね。好きにさせましょ。」

亜由美

「そんなんでいいのか?」

喜恵

「いいんじやない?」

亜由美

「そうね。私達には関係ないもんね。姉さんが悪いんだから。」

駆逐艦風級（後番や）

「J意見、「J感想、「J質問等ござりがござりましたらお寄せください。」

潜水艦伊一級

早紀

「遂に登場しなくなつたわね。」

亜由美

「全く…………奴隸のくせに」

嘉恵

「まあまあ。姉さん達もさう言わざるに」

舞

「あの～。すいません。」

早紀

「あ～。舞ちやん。どうしたの？」

舞

「そろそろ私達の説明をしてもらいたいんですけど……」

早紀

「あ～。説明してもらいたい？」

舞

「は～。」

早紀

「なり。『説明してください早紀様。私はあなたの犬です。』と言
いなさい。」

舞 「えつ……」

早紀 「どうするの？」

舞 「言います。」

早紀 「なら、早く言いなさい。」

舞

「説明していく下さい早紀様。私はあなたの犬です。」

早紀

「賢いわね。舞ちゃん。それじゃあ首輪をしましちゃう。」

舞

「えつ……何故ですか？」

早紀

「だつて、犬ですって言つたでしょ。」

舞

「…………はい。」

早紀

「それじゃあ、早速。」

舞に首輪をする早紀。

舞
「グスツ」

亜由美

「あの変態姉が。」

喜恵

「由美だけではなく舞にも……」

乱

「姉の為にも、説明をお願いします。」

亜由美

「あら、乱まで。」

喜恵

「わかりました。私が説明します。」

乱

「お願いします。」

潜水艦伊一 一級

全長100メートル
最大幅23メートル
満載排水量7500トン
速力35ノット
70センチ魚雷発射管6門
最大潜航深度200メートル

世界で初めてポンプ式噴流エンジンを搭載。

このエンジンのお陰で35ノットの速力が出せる。

乱

「ありがとうございます。姉が我が身を捧げて説明をしてもらつた
ので姉の犠牲も役に立つたと思います。」

亜由美

「大げさな……」

「奴隸。なぜ前回は出てこなかつた?」

作者

卷之三十一

早紀

卷之二十一

「早紀女王陛下様。お許しを~」

早紀

死ねえ

「ギター」 作者

ドグワアアアアアン

「ふつ。謂調め。」

早紀

「奴隸が死んだから代わりに説明するわ。」

艦上戦闘機陣風

全幅 12 メートル
全長 11 メートル
最大速度 770 キロ
実用上昇限度 15800 メートル
武装 30ミリ機関砲 2門
13ミリ機銃 2門
対地口ケット弾 6発
航続距離 7500 キロ

ジェットエンジンを搭載する予定だったが、開発が難航し現有のエンジンの馬力アップを狙つた。

そのお陰で速度、上昇限度、航続距離が向上した。

エンジンには排気タービン過給器を搭載。
機上レーダー及び小型無線機を搭載。

二重反転八枚ペラ装備。

以上が艦上戦闘機陣風の概要である。

「奴隸もよく考えたものね。」

作者

「ありがとうございます。早紀女王陛下様。」

早紀

「ありがとうございます。復活したの？」

作者

「ありがとうございます。」

早紀

「誉めてない、誉めてない。」

作者

「しかし、早紀女王陛下様はあれですね。」

早紀

「何？」

作者

「かわいいです。」

早紀

「！？」

作者

「」

「胸もいい大きさだし……」

早紀

「死ねえ〜〜」

作者

「ギャー」

早紀

「もう復活するなつ！〜〜！」

艦上戦闘機陣風（後書き）

疑問点などがあつましたらお寄せください。

艦上攻撃機流星

亜由美

「さて、奴隸。せつせと説明をして帰らつではないか。」

作者

「了解いたしました。」

亜由美

「と書いつよつ、じんなの書いて意味があるのか？奴隸。」

作者

「勿論ですとも、亜由美女王陛下。この小説は本編に登場する兵器を詳しく解説する事により、更に本編を楽しんでもらうのが目的です。」

亜由美

「わかつたわ。それじゃあ説明お願ひね。」

作者

「了解いたしました。亜由美女王陛下様。」

艦上攻撃機流星

全幅12メートル

全長13メートル

最大速度650キロ

実用上昇限度11500メートル

武装対艦口ケット弾8発

爆装1トン徹甲弾及びナパーム弾4発

雷装850キロ長魚雷

航続距離7300キロ

主翼は世界初となる逆ガル型の主翼を採用した。

その為、流星は世界初の急降下爆撃、雷撃兼用の航空機となつた。

以上が艦上攻撃機流星の概要である。

亜由美

「よく考えついたわね。奴隸。」

作者

「ありがとうございます。亜由美女王陛下様。」

亜由美

「まあ、詳しくは聞かないから安心しない。」

作者

「.....」

亜由美

「どうしたの？」

作者

「はいっ！――！何でもありません。」

亜由美

「本当に？」

作者

「はいっ！――！」

亜由美

「そう。ならいいわ。」

作者

「それではこの辺で。」

亜由美

「それと、奴隸の悩み何だけど。フイラデルフィア実験について知つてている人がいたら、お手数ですが本編の所にお書きいただけたら幸いです。つて言つてたわ。知つている人がいたら奴隸を助けるつもりで書いてやってね。」

艦上攻撃機流星（後書き）

亞由美女王陛下様に代わりに言つてもらいましたが、フィラデルフィア実験について知つてゐる人がいたら本編までお手数ですがお書きください。
よろしくお願ひします。

艦上偵察機彩雲

喜恵

「奴隸さん。このような事は早く書いて早く終わりましょう。」

作者

「了解いたしました。喜恵女王陛下様。」

喜恵

「それでは、艦上偵察機彩雲の説明です。」

艦上偵察機彩雲

最大速度880キロ

実用上昇限度2300メートル

全長13メートル

全幅10メートル

航続距離9300キロ

世界最速の艦上偵察機である。

実用上昇限度が低いのは速度に重点を置いた為である。

喜恵

「やれやれ。」

作者

「どうされました？喜恵女王陛下様。」

喜恵

「本編を全く書かず二三のよつた物を書き出さんですか？」

作者

「大丈夫ですよ。喜恵女王陛下様。二つもその日に書いて、その日に投稿していますから。」

喜恵

「え？？それじゃあ金十日と三日で本編を投稿してねばど、一日で書いているの？」

作者

「はー。そうです。あつ、言い忘れましたが私の執筆スケジュールは月～木がこの兵器解説の執筆。金土日は本編の執筆です。」

喜恵

「せんね。」

作者

「あつがとつぱります。」

喜恵

「よし。 そつと決れば頑張るわ。」

作者

「了解いたしました。喜恵女王陛下様。」

作者

「あつ、言い忘れましたが草薙先生と一等海士長先生も兵器解説を連載化しています。そちらの方も」「覗くださー。」

喜恵

「そつゆつ事は別にいいんじゃない?」

作者

「まあやつ言わずに、草薙先生と一等海士長先生も私より先輩なんですか。」

喜恵

「まあいいわ。」

作者

「それでは次回をお楽しみに」

早期警戒機極星

早紀
「なんで私なの?」

作者
「しようがなこじやないですか。早紀女王陛下様。」

早紀
「私がメインヒロインだから。」

作者
「イエス」

早紀
「わかったわ。」

作者
「あらがとうござります。早紀女王陛下様。」

早紀

「それじゃあ説明して。」

作者

「了解いたしました。」

早期警戒機極星

最大速度850キロ
実用上昇限度8000メートル
全長13メートル
全幅11メートル
航続距離9000キロ

対空、水上レーダーを装備した航空機である。

世界初の早期警戒機である。

早紀

「よく思いついたわね。」

作者

「ありがとうございます。」

早紀

「そりそりと、奴隸。」

作者

「なんでしょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「本編の話なんだけど。」

作者

「はい。」

早紀

「何故に、フイラデルフィア実験について調べる必要があるの？」

作者

「……………言わなければいけませんか？」

早紀

「もちろん。」

作者

「実は、本編の中でアメリカ本土上陸作戦でフイラデルフィア実験の内容が必要なんです。」

早紀

「それ以上は言えないの？」

作者

「はい。残念ですがこれ以上は。」

早紀

「まあね。言い過ぎると読んだ時の新鮮味がなくなるからね。」

作者

「お気遣い感謝します。」

早紀

「まあ、感謝しなさいね。」

作者

「ありがとうございます。」

早紀

「それじゃあ帰つましょ。」

作者

「了解いたしました。」

作者

「それでは次回に。」

攻撃ヘッジプロター

早紀 「う~ん。」

作者 「どうされました? 早紀女王陛下様。」

早紀 「めんどくさい……。」

作者 「そんな事言われましても…………」

早紀

「ぱっと説明してぱっと終わりさせまじょ。」

作者

「全く。早紀女王陛下様は。草薙先生と凛様は仲良く(?)してこ
るの……。」

早紀

「何か言つたかしら? 奴隸君。」

作者

「いえつ……! 何でも「わせん……。早紀女王陛下様。」

早紀

「なり説明をしなさい。」

作者

「了解いたしました。」

攻撃ヘリコプター

最大速度510キロ

実用上昇限度4500メートル

全長17メートル

全幅3メートル

武装30ミリ機関砲1門

対地口ケット弾12発

対艦口ケット弾10発

航続距離2500キロ

世界初となる実用ヘリコプターである。

早紀

「何をモ^デルに考えたの?」

作者

「アメリカ軍のAH-1ヒュイコブラをモ^デルにしました。」

早紀

「けど、モ^デルにしただけで、その他はちゃんと考えたんだからな

かなかね。」

作者 「ありがとうございます。」

早紀

「して、作者。」

作者

「何でしょつか？早紀女王陛下様。」

早紀

「何か皆様にお知らせが有るみたいね。」

作者

「あつ。そうでした。」

作者

「皆様にお知らせです。この攻撃ヘリコプターと対潜ヘリコプターは名前が有りません。本編の話ではヘリコプターの改良型を作りますので、攻撃ヘリコプター、対潜ヘリコプターの両方の名前を募集します。ご協力お願いします。」

対潜ヘリコプター

早紀

作者

卷之三

対潜ヘリコプター

最大速度500キロ

実用上昇限度 4300メートル

全長15メートル

金幅3メートル

対替魚雷4発

航続距離 1800キロ

対潜水艦攻撃に重点を置いたヘリコプターである。

「了解」之「未」之「」。

「私は帰る。」

作者

「さて、皆様に重ねてお願いします。攻撃ヘリコプター、対潜ヘリコプターの両方に名前が有りません。その為、本編で両方の改良型を作る予定ですが名前がしつくり来ません。そこで皆様から名前を募集したいと思います。この小説、本編、どちらでもいいのでお書きください。お忙しいと思いますが、皆様の考えた名前が小説に登場します。」協力お願いします。」

早紀

「全く、名前位考えなさいよ。」

作者

「あれっ？帰つたんじゃなかつたんですか？」

早紀

「まあそうだけど、あんた一人じゃ頼りないからね。」

作者

「酷いっ！…………」れでも私は現実の世界では委員長をやつているのよ。」

早紀

「あんたがねえ～」

作者

「楽なもんですよ。嫌な事があれば、委員長の権力を使い拒否出来ますからね。その他の役員も私が任命しましたから。何処かの総理みたいに、俺の内閣ですよ。」

早紀

「まあ。なんとかやつていけそうね。」

作者

「勿論ですとも、これからも頑張っていきます。」

作者

「それでは皆様。名前の候補をお待ちしております。どうかご協力お願いします。」

超重爆撃機富嶽級

作者

「今日は超重爆撃機富嶽級について説明します。」

早紀

「早く始めなさいっ！！！」

作者

「了解いたしました。それでは。」

超重爆撃機富嶽

最大速度750キロ

实用上昇限度21500メートル

全長58メートル

全幅65メートル

武装35ミリ機関砲15門

88ミリ4連装ロケット弾発射機4基

搭載爆弾55トン

航続距離29500キロ

中島航空機が開発した、世界最大の航空機である。

現在、満州の完全オートメーション工場にて大量生産が行われてい

る。

早紀
「奴隸。」

作者
「何でじょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「超重爆撃機富嶽級とあるが級と書つゝとは他にもあるのか？」

作者

「勿論です。掃射機と輸送機の説明をします。」

早紀

「早くするのよ。」

作者

「イエスマイロード。」

最大速度750キロ

実用上昇限度21500メートル

全長58メートル

全幅65メートル

武装35ミリ機関砲200門

航続距離29500キロ

爆撃機富嶽に爆撃搭載能力をなくし、

機関砲を200門装備した。

完璧な殺戮兵器である。

輸送機富嶽

最大速度750キロ

実用上昇限度21500メートル

全長58メートル

全幅65メートル

武装35ミリ機関砲10門

航続距離29500キロ

1個大隊と20式重戦車を搭載可能

機関砲を10門だけ装備した、輸送機である。

作者

「以上が重爆撃機富嶽級の説明です。」

早紀

「よし。今回はこれで終わりよ。」

作者

「それでは頃わん。次回をお楽しみに」

艦上戦闘機轟天

作者

「本編では早紀女王陛下様達の生死不明ですから、今回は私が説明します。」

艦上戦闘機轟天

最大速度 1250 キロ

実用上昇限度 18300 メートル

全長 15 メートル

全幅 13 メートル

武装 5.8ミリ機関砲 2門

15ミリ機銃 2門

空対空ミサイル 8発

空対艦ミサイル 6発

航続距離 9300 キロ

日本初のジェット戦闘機である。

ター・ボ・ジ・エ・ツ・ト・エン・ジンを2基搭載したおかげで1250キロの速度が出せる。

ミサイルは全てウエポンベイに内蔵している。

機体には真っ黒な塗装をしている。

作者 「以上が艦上戦闘機轟天の概要です。」

作者 「本編では早紀女王陛下様は原爆によつて消滅しました。」

作者

「次回最終回です。」

作者

「と言ひつつ、本当に最終回かな?」

作者

「まあ、本編の次回投稿は今週の金曜日です。」

作者

「そこで、真相があきらかに……」

作者

「評価・感想の草薙先生とのやりとりで出てきた、ファイラーデルフィア実験が何か関係あるかも知れませんよ。」

作者

「草薙先生とのやりとりもあるし、極上艦魂会の説明文も読んだらわかると思います。」

作者

「次回が本当に最終回かどうかが問題です。」

作者

「これだけは言つておきますが私は途中で投げ出すところはしませんので。」

作者

「このままで言えれば、次回が本当に最終回かどうかがわかると思います。」

作者

「この大日本帝國最新兵器解剖も金曜日まで更新しません。ご了承ください。」

作者

「それでは、次回が本当に最終回かどうか、答えは金曜日にわかります。」

作者

「しばしお待ちください。」

艦上攻撃機海王

早紀

「奴隸つ……！」

作者

「はいっ……何でいじめられてしまうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「私達を生死不明にしておながり悠々としているのね。」

作者

「嫌ですよ～。早紀女王陛下様。私はもう心配で心配で……」

早紀

「そんな口だけの奴は信用しないわ。」

作者

「いえっ……そんなことな……」

早紀

「ちょっと来なさい。もう一度調教してあげるから。」

作者

「いいです……！」

早紀

「問答無用……！」

作者のみでおちに鉄拳を食らわす、早紀女王陛下様。

作者
「ぐはっ……」

早紀

「さあ、行くわよ。」

作者を引っ張つていいく早紀女王陛下様。

作者
「おっ……お許……し……を」

早紀

「フフフ。」

亜由美

「奴隸と姉が個室へ消えていったので、私が説明します。」

艦上攻撃機海王

最大速度930キロ
実用上昇限度13500メートル
全長18メートル
全幅20メートル
武装20ミリ機銃5門
空対艦ミサイル8発
爆装1トン徹甲弾2発
クラスター弾4発
航続距離9000キロ

双発ジェット攻撃機である。

ジェット化にともない雷装は破棄した。

亜由美

「以上が奴隸が考えた概要みたいです。」

亜由美

「しかし、奴隸曰く紺碧の艦隊から名前をお借りしました。」

亜由美

「それではこれで失礼します。」

亜由美

「航空機は奴隸と姉の担当なのに私を引っ張りだしてくるとは……」

早紀

「奴隸。私の足を舐める。」

作者

「何故ですか？……！」

早紀

「ほお～う。奴隸の分際で私の命令を無視するのか……」

作者

「分かりましたよ。舐めますよ。」

早紀

「判ればよいしい。」

亜由美
「変態が
……
」

船上偵察機嶺花

早紀

「めんどうやること……！」

作者
「は……」

早紀

「あ、じゃないっ！！！」

作者
「はいっ！！！！すいませんでした。」

早紀

「よしぃ。では早く説明を始めろ。」

作者
「ハイスマイロード」

船上偵察機嶺花

最大速度 1300キロ

実用上昇限度 9300メートル

全長 13メートル

全幅10メートル

航続距離 11500キロ

双発ジェット偵察機である。

現在の所、世界最速の航空機である。

早紀

「よし、では次にいくぞ」

作者

「了解いたしました。」

早期警戒機星雲

早紀

「では、直ちに説明を開始せよ。」

作者

「了解いたしました。」

早期警戒機星雲

最大速度1150キロ

実用上昇限度13000メートル

全長13メートル

全幅10メートル

航続距離10500キロ

双発ジェット警戒機である。

簡単に言えば『一二式水上レーダー』と『一五式対空レーダー』を装備した航空機。

艦隊の上空に二十四時間交代で居座る。

早紀

「ねえ、〇〇七。」

作者
「はい。何で「じぞこまじょうか？早紀女王陛下様。（奴隸つ呼んで
ないな）」

早紀

「これで、兵器の説明が終わつたけど、次回からひざうなの？」

作者

「えつ？終わつてないですよ。早紀女王陛下様。」

早紀

「終わつてない？」

作者

「はい。兵器とは言いにくいけれど、砲弾やレーダー、フィラーテル
ファイア理論等が残つてますから。」

早紀

「その説明の時には誰と説明するの？」

作者

「勿論、早紀女王陛下様とです。」

早紀

「……」

作者

「……」

「どうされました？早紀女王陛下様。」

早紀

「私じゃなくて、亞由美か喜恵と説明すると言えればもう、奴隸と呼ばずに〇〇フと呼んであげようと思つたの」、自分でその道を開いたわね。」

作者

「あつ、嫌つ、その……」

早紀

「もう遅い……お前は一生奴隸だつ……。」

作者

「お許しを～～」

早紀

「死ねつ……」

作者

「それだけは、お許し下さ～～。」

早紀

「成敗つ……」

作者

「ギャー——」

蒸気力タバルト（前書き）

これからは、兵器以外を解剖していきます。

蒸気力タパルト

早紀

「ねえ。奴隸。」

作者

「何で「奴隸」にまじょうか？早紀女王陛下様」

早紀

「今回のこれは、兵器じゃないよね。」

作者

「はい。もう、兵器は全て解説しましたから。」

早紀

「そりなの。それなら、早くしなさい。」

作者

「了解いたしました。それでは。」

蒸気力タパルト

機体をシャトルに乗せて、蒸気の力を使い射ちだす。

機体を押し出すシャトルは2本のシリンダー内のピストンに繋がっており、ボイラーで発生された蒸気をシリンダー内で圧縮させ、射出ボタンで解除すると、シャトルが蒸気の力で押し出され、機体は最短の滑走距離で発艦出来る仕組みになっている。

作者 「以上が蒸気カタパルトの説明です。」

早紀 「ねえ、奴隸。」

作者 「はい、何でしちゃうか？」

早紀

「今ここの、奴隸解放を宣言する。」

作者

「！？いきなり何ですか？」

早紀

「あなたを普通の作者として扱うのよ。」

作者

「本ですか！……！……ありがとうございます。」

早紀

「いいのよ。これから頑張るのよ、作者。」

作者

「ありがとうございます。早紀様。これからも頑張ります。」

早紀

「そうやつ。頑張るのよ。」

作者

「了解いたしました。頑張ります。」

早紀

「フフ、男つてちょろいものね。」

作者

「何か言いましたか?」

早紀

「何も言つてないわよ。」

作者

「そうですか……それでは皆さん失礼します。」

超々重量徹甲弾

早紀

「よし、作者よ。説明を開始せよ。」

作者

「了解いたしました。」

超々重量徹甲弾

従来よりも弾頭重量を向上させた砲弾を使用、弾頭形状と材質の見直しを行つて更に弾頭重量が増した。

1発あたりの弾重量は2・4トン、つまり斉射の際の投射弾頭は、約22トンである。

この砲弾を装備したため、大和級は世界一暴力的な破壊力を得た。

大和級はそのために自身の主砲弾に耐えられない艦となつた。

早紀 「私つて自分の砲弾に耐えられないの？」

作者 「はい。残念ながら……」

早紀

「でも、それは裏を返せば自分以外の敵艦の砲弾に耐えられる事よ
ね。」

作者 「はい。そうです。」

早紀

「それならいいわ、それじゃあね。」

作者 「はい。」

作者 「それでは、監さん次回に。」

三式弾（V-T信管付）

早紀

「よしひ、早く説明しましょう。」

作者

「了解いたしました。」

作者

「それで何がいいんだ。」

三式弾（V-T信管付）

V-T信管を装備した対空砲弾である。

敵機をレーダーで捕らえると砲弾が炸裂し子爆弾が飛び出す。

早紀

「至極、簡単な説明ね。」

作者

「はい、すいません。」

早紀

「怒ってはないわよ。」

作者

「ありがとうございます。」

早紀

「それじゃあ次回も、頑張るのよ。」

作者

「了解いたしました。」

四式弾

早紀

「はいっ、説明開始。」

作者

「了解いたしました。」

作者

「それではどうぞ。」

四式弾

潜水艦攻撃を可能にした砲弾である。

敵潜水艦の真上で砲弾が破裂、内部にある子爆弾が水中に潜り込み、敵潜水艦に向かい、爆発する。

作者

「これが、四式弾の説明です。」

早紀

「あれね、これがある事によつて私達は潜水艦への攻撃が可能になつたのよね。」

作者

「そうです。私は早紀様達を無敵の戦艦にしようとした考えまし。」

早紀

「そうね、対艦対空対地対潜全てにおいて最強ね。」

作者

「そうです！……早紀様達は最強無敵です。」

早紀

「けどこの昭和のね、凛達には負けるわね。」

作者

「大丈夫です！……もついい時期でしう、早紀様に重大発表です。」

早紀

「何なのよ、言ひなさい。」

作者

「では、発表します。」

早紀

「なに。」

作者

「今書いている、第七独立機動艦隊～神出鬼没！！米海軍の悲劇～は太平洋戦争と第一次世界大戦の話です。」

早紀

「それで？」

作者

「第一部は第三次世界大戦の話を書きます！――！」

早紀

「！？」

五式弾（クラスター弾）

早紀

「説明を開始せよ。」

作者

「了解いたしました。」

作者

「それではどうぞ。」

五式弾（クラスター弾）

対地攻撃を目的とした砲弾である。

砲弾の中に多数の子爆弾が内蔵されており空中で分解、四方へ子爆弾をばらまき広範囲を爆破破壊する。

子爆弾であるが、着弾と同時に成形炸薬がノイマン効果で高熱・高圧のジェット流を噴射し、滑走路を焼き切る。

そして後部弾頭が地面に貫入して爆発を起こす。

早紀

「何か、これだけ詳しいわね。」

作者
「うう……それは聞かない約束だつたではありますか。」

早紀

「あらつ？ そうだけ？」

作者
「そうですよ。それより、早紀様。」

早紀

「なに？」

作者
「先程のこの小説の第一部の話です。」

早紀

「ああ、第三次世界大戦の事ね。」

作者

「はい、第三次世界大戦は2035年に勃発します。」

早紀

「けど、それを書くには早く今書いているのを終わらせないといけないわよ。」

作者
「確かに……」

早紀
「それじゃあ早く書きなさい……」

作者
「了解いたしました。あつ、早紀様も第一部に登場しますので」

早紀
「えつ！？2035年なのに？」

作者
「はい。第七独立機動艦隊は健在ですか？」

早紀
「健在といつてもだいぶ老朽化してるんじゃないの？」

作者
「大丈夫です。全て新造艦です。」

早紀

「もしかして、私達は艦魂として、宿る艦をその新造艦にしたの？」

作者
「はい。最初は新しく艦魂を作ろうと思つたんですが止めました。」

早紀

「そうなの…………まあ、頑張りなさい。」

作者

「了解いたしました。」

早紀

「それじゃ。」

三 式射撃レーダー

作者

「今日は三式射撃レーダーの説明です。」

亜由美

「早くしろ。」

作者

「了解いたしました、亜由美様。ではどうぞ」

三 式射撃レーダー

大日本帝國海軍の最新の射撃レーダーである。

対水上、対空問わずに15の目標に対するリアルタイム照準と追尾が可能になった。

この射撃レーダーのおかげで最大射程（5万5000メートル）でも大和級は初弾命中が出来る。

亜由美

「ところで作者。」

作者

「何でしょつか? 亜由美様?」

亜由美

「またしても外伝のような物を書き始めたな?」

作者

「ああ、プロジェクトX～三式射撃レーダー開発物語～の事です
ね。」

亜由美

「まつたく、暇な奴だな。」

作者

「暇ではありますよ、亜由美様。」

亜由美

「なぜ、あれを書き始めたのだ?」

作者

「水香先生への恩返しとしてでしょ?」

亜由美

「恩返し?」

作者

「はい、私を水香先生の小説に登場させていただきましたか。」

亜由美

「そうか。」

作者

「水香先生、ご迷惑でしたら書ってください。すぐに消しますから。」

」

亜由美

「まあ、多めに見てやつてくれ。」

作者

「けど、いいですね。もしかしたら他の物でもプロジェクトXをシリーズ化するかも知れません。」

亜由美

「まあ、ほじほじに頑張れよ。」

作者

「ありがとうございます。亜由美様。」

亜由美

「頑張れ~」

作者

「頑張ります。それでは皆さん、失礼します。」

一式水上レーダー

作者

「さて、今日は一式水上レーダーの説明です。」

早紀

「早くあるつ……！」

作者

「了解いたしました。では。」

一式水上レーダー

150キロ先の敵艦を見つける事が出来る。

早紀

「えつー…?」「それだけ?」

作者

「……」

早紀

「死刑囚、007。最後に何か言い残す事はないか?」

作者

「では、皆さん。これからもよろしくお願いします。」

早紀

「では、死刑を執行する。」

作者

「はい。」

作者

亜由美

「ふう。姉が作者と何やらやつてているが……」

「グハッ！……早紀様。止めてください……」

早紀

「 もうと泣き叫べ…………ドムガフ…………」

亜由美

「…………」

亜由美

「 あつ、すいません。ちょっと味れてしまつて。」

亜由美

「 もう、やる気がなくなつた。」

亜由美

「 失礼する。」

一 二五式対空レーダー

亜由美

「おい、説明しろ。」

作者

「了解いたしました。」

一 二五式対空レーダー

200キロ先の敵機を見つける事が出来る

「以上……！」

作者

「解散つ……！」

亜由美

「イエッサー」

作者

三三三式ソナー

喜恵

「作者さん、説明をお願いします。」

作者

「了解いたしました。では。」

三三三式ソナー

水深500メートルまで探知可能

喜恵
「作者さん。」

喜恵
「はい、何でしちゃうか？」

喜恵
「何か簡単すぎない？」

喜恵
「大変申し訳ありません。ここは死んでお詫びを……」

喜恵

「いやいや、やめでな……」

作者

「ありがとうございます……早紀様は短刀を手渡す始末……」

喜恵

「あら、お姉さんはそんな事を……」

作者

「はあ……」

喜恵

「なら私も……ヒヒヒ」

作者

「喜恵様？」

喜恵

「死刑執行……！」

作者

「お許しを～」

喜恵

「フフフ、ハハハ」

作者

「ぎゅ～～～」

フィラデルフィア理論

早紀

「最後は何？」

作者

「早紀様達を救つたフィラデルフィア理論です。」

早紀

「よし、説明開始。」

作者

「了解いたしました。では。」

フィラデルフィア理論

艦橋の上部に円形のエネルギー吸收装置を設置し、敵が投下した原爆の破壊エネルギーを吸收。

エネルギー吸收装置に吸收したエネルギーをその下に設置した拡散装置にエネルギーを移し、エネルギーを艦全体に放出して、空間移

動を実現した。

将来的には原子力機関という機関を艦に装備し、自分自身で空間移動を可能に出来るようにする。

早紀

「いや～長かった。」

作者
「確かに。」

早紀

「よく考えた。」

作者

「ありがとうございます。早紀様。」

早紀

「うむ。」

作者

「して、早紀様。」

早紀

「何？」

作者

「私はすごいことに気付きました。」

早紀
「何?」

作者
「独立機動艦隊には何かしらの特殊装備があるのです。」

早紀
「どう言ひたと?」

作者
「では、説明を。」

早紀
「早くしろ。」

作者
「早紀様達の第七独立機動艦隊はフイラデルフィア理論という空間移動装置を装備していますね。」

早紀
「確かに。」

作者

「草薙先生の独立機動艦隊はアイギスと言うバリアシステムを装備しています。」

早紀
「本当だ。」

作者

「しかも、その特殊装備の登場には敵の攻撃を受けて深刻なダメージを受けたような書き方をしています。」

早紀

「？」

作者

「草薙先生のアイギスシステムの登場はアメリカ軍の攻撃を受け深刻なダメージを受けたかも知れないと書かれています。」

早紀

「本当だ。」

作者

「早紀様達も原爆を10発受け消滅したかも知れないと書きました。」

「

早紀

「本当だ。」

作者

「新米士官先生の小説は第七独立機動艦隊が登場します。」

早紀

「本当だ。」

作者

「出来れば、何か特殊装備が登場する事を望みます。」

早紀

「なかなかのものね。」

作者「では、これで。」

25式重戦車

作者
「わたくし、今回25式重戦車の説明です。」

作者
「それでは、沙織様。じつめ……！」

沙織

「どうも、皆様はじめまして。25式重戦車の車魂、沙織です。よろしくお願いします。」

作者

「それでは解説を始めます。」

沙織

「お願いします。」

作者

「では」

全長10メートル

全幅5メートル

速度50キロ

主砲125ミリ砲1門

機銃30ミリ重機関銃1門最大装甲厚280ミリ

海軍と鈴木商店が共同で開発した重戦車である。

『三式射撃レーダー』を小型化した物を装備しているため命中率が非常に高い。

沙織

「ふう。やれやれね

作者

「そうですね」

沙織

「だけど、何故に私を登場させたの？」

作者

「何故とは？」

沙織

「車魂よ。」

作者
「あ～、車魂ですか。」

沙織
「そうよ。」

作者
「簡単ですよ。」

沙織
「どう。」

作者

「艦魂」は長い歴史がある。飛魂なるものも登場した。では、海空とくれば陸でしょ。といつわけで、車魂は誕生しました。」

沙織

「至極簡単ね。」

作者

「はい。」

沙織

「と書いつよ。本当に作者わんが一番ですか？」

作者
「何が？」

作者
「何が？」

沙織

「車魂を出した。」

作者

「う~ん。わかりません。」

沙織

「まあ、いいじゃない。」

作者

「そうですね。」

沙織

「車魂が広がればそれでよし。」

作者

「確かに。」

沙織

「これからも頑張っていこう。」

作者
「お~」

謝辞

本編の第七独立機動艦隊～神出鬼没！～米海軍の悲劇～が完結しましたので、こちらも終わりです。

明日、第一部を投稿いたします。

短い間でしたがありがとうございました。

第一回をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4198f/>

大日本帝國軍最新兵器解剖

2010年10月9日02時15分発行